

第6章 授業のオープンエンド化を支える条件②

第一節 授業のオープンエンド化、その授業づくりに隠された条件

「授業を開いて終わるということは分かりました。では、いつまとめるのですか？」

「まとめをしないで子どもたちに知識の定着がはかれるのですか？」

オープンエンドの授業を行っていて、よく受ける質問である。

筆者は、**オープンエンドの授業は学習の生活化と考えている。知識は活用するものであって、まとめとして定着をはかるためのものではない。**

共通理解をはかるために、概念や事実として確認することはある。しかし、オープンエンドの学習で子どもたちが生活の中から事例を見つけ追究を深めていくと、様々な具体物を入り口として共通概念は応用的に変化していく。

第5章では「スーパーのくふう」「東根のさくらんぼ」についての具体物を通しての子どもたち個々の追究を述べてきた。各段階での授業のおさえはあっても、終着駅的なまとめは存在しない。強いて言えば「？」での疑問としてのまとめと言える。それは定着をはかるものとしてではなく、**あくまでもこれからの追究の出発点**なのである。視点は、いつでも、追究へと開かれているのである。

授業は、最終的には、まとめをして知識の定着を図る終点へ向かう、という視点では語れないものが、そこにある。

45 分間の授業、それが教師の勝負の場である。

しかし、それは部分でしかない。

第3章で「有田和正による新しい授業のあり方」を示した。筆者のオープンエンドの授業理念である。有田が言うように、授業は個々の追究のスタートの場なのである。学習の場は、授業を中心とした子どもの生活全体なのである。

教師は子どもの姿を授業の場だけでなく、学校生活・家庭生活全体で捉えようとしなければならない。授業はあくまでもその一部分なのである。

そうした視点に立てれば、教師は授業後の子どもの姿に関心が向く。友達と一緒に調べに行く予定を話し合っている小集団、そうしたことでなく、昼休みに何気なく本を読んでいる子に寄り添い「あっさくらんぼのことが書いてあるんだね。」とつぶやく。ベランダにおかれた温度計をのぞき込む子に「寒くなってきたねえ。今何度あるの？」とたずねる。そうしたところでの個々の子どもの姿が気になってくる。子どもを見る目が鍛えられる。

朝夕の教師の話の中に、「Bくん、昨日昼休みに読んでいた本にはどういうふうにかいてあった?」「昨日は寒いなあと思っていたらCさんが気温を計ってくれました。何度あったっけ?」という子どもの姿を通した話題が出るようになる。その子との出来事を通しての会話が、学級全体の子どもたちの意識を変えていくようになる。

するといつしか朝の会での「日直の話」に個々の追究が登場してくるようになる。

子どもたちの追究が書かれた日記を学級通信で広げていくことについては第4章で述べた。しかし、本来はこうしたある事実をもとにした子どもとの対話の場面の方が学級全体

に与えるインパクトは大きい。その場で多くの子の反応が得られるからである。

「ぼくが昨日読んだ本には寒河江のことが書いてあったよ。」

「それだったら、おじいちゃんに聞いたことがあるよ。」

話題は具体的に広がっていく。

このような子どもからの発信をいかに自然に導き出せるか。

この時間を如何に楽しく行えるか。

確実に授業のオープンエンド化の土台となっていくことである。

子どもたちが育ってくれば、こうした話し合いは子どもたちだけで行えるようになる。そしてそこには、社会科や理科などの垣根はなく、1つの物事の生活を通した捉え直しがあるだけである。教科から開かれた生活を土台とした話し合いは、このようにしてスタートしていく。

本来子どもたちは調べたことや新しい発見は誰かに伝えたいものである。それを授業の場だけに限ることは教師の決めつけでしかない。発表の得意でない子は書くことによって、自信のなさそうな子には教師が口火を切って寄り添いながら。子どもたちは内心その時を待っている。そうした場を授業の他にどれだけ準備してあげられるかである。

3時間目の始まりの挨拶をしようとする時、廊下から駆け込んできた子が言う。

「先生、Tくんがせみのぬけがらを見つけたよ。」

「うわ〜、本当だ！」

「背中の中が割れている！」

「いつぬけたのかな？」

挨拶をするために立っていた子たちがせみのぬけがらを見に動き出す。

どこの教室でもある場面である。

その一瞬に、教師が子どもと一緒に動けるか、そこに学びの共同体の姿が問われる。

『どれどれ……先生にも見せて！』教師の動きにつられて多くの子が動き出す。

こうした動きを子どもと一緒に楽しんで行えるかが大切である。**佐伯の言う「自己原因性」⁽¹⁾を実感できた子は、大きな自信となって「動く」ことを楽しめる。それを見た子は、自分も同じようにできる安心感を得る。そこに子どもの活動のエネルギーが生まれる。**

「虫のことは理科の時間にね！」

「挨拶をしてからね。」

教師がその流れを切ってしまうとは、子どもたちに感動は伝わらない。知識の伝達ではきたとしても、感動は伝わらない。感動のないところに子どもたちの真の追究は生まれないのである。

子どもの動きに合わせて流動的に授業を動かす。そうすることが子どもとの一体感を生み、学級が共通の学習の場となっていることを実感させる。

時には大胆に、しかし、あくまでも子どもの動きを繊細に受け止めて。

こうした指導には、子どもたちの関心を高めることはあっても学力の定着が図れないという批判が聞こえてくる。騒がしさが学習の妨げになるという批判もある。しかし、子どもたちは騒がしいほどの歓声を発していても、感動を共有する友達の話は聞くものである。その一瞬を誰よりもわきまえているのが子どもなのである。

そして最終的には、感動の少ない意味の薄い知識の定着を図られた子どもたちよりも力は伸びていく。第5節第二節で実践を述べてきた子どもたちは4年生4月に受けた全国標準診断的学力検査で、大規模校にも関わらず

国語 57.9 社会 59.9 算数 59.2 理科 61.6 学級平均 59.8

という成績を残すことになった。

固定化された授業の流れを、子どもの動きに合わせて開かれた状態へと導くことが教師の大きな役目である。**節度のある自由な流れを子どもたちは好む。**そして、そうした流れの中でこそ授業のオープンエンド化はその効果を発揮する。

そのためには、子どもと教師の開かれた心がその根底に存在しなければならない。

学級づくりが重要視される。

第二節 授業づくりと学級づくり

筆者の学級経営の方針は、新採時より大きく変わっていない。以下の3点である。⁽²⁾

①子どもの価値観の多様化を図る。

学力・運動能力による評価が重要視されがちな今日、学校生活・家庭生活などでの出来事や子どもの感想などを多く取り上げることにより価値観の多様化を図る。子どもを認める場（子ども同士・子どもと教師）を多く提供することによって、子ども同士がお互いを認め合い、気持ちのつながりを強くし集団意識を高め、今日問題となっているいじめ・非行につながる孤立感をなくしていくことになるを考える。具体的には、

- ・子ども一人一人を、ある面からだけではなく、幅広く捉え育てていく。
- ・学年・学級による集団活動などでの多くの経験を通して、新しい自己発見の機会を与えていく。

②お互いの良いところを素直に認め合えるようにする。

高学年になると周りの者が見えてくるため、友達の長所をねたみ、自分を高めようとする前に欠点を指摘し揚げ足を取る者が出てくる。まず友達の良いところを認めることから友達の理解を深めさせたい。

- ・お互いの短所を指摘し合う前に、長所を認め合い個性を認め合う姿勢を強めていく。
- ・長所を認め合うことにより、個々に自信を持たせ自分の欠点を見つめさせ、友達の失敗をも許し合い、助け合える集団を築いていく。

③子どもの長所をさらに伸ばす。

- ・自分で自信を持って取り組めるものを見つけさせ、育てていく。
- ・校外コンクールなどへのチャレンジの機会を多く与え、感動と共に自信を持たせる。

学級づくりと授業づくりは、それぞれが大切なものである。筆者はそういう認識で教壇に立ってきた。しかし、その2つにつながりを強く感じたのは、オープンエンドの授業を意識するようになってからである。第5章の第一節の段階での筆者は教材論が中心であり、学級づくりと授業づくりを密接に関連づけることはできずにいた。前述したとおり、それ

故に、有田実践の追試がうまくいかなかったのである。その現実を目の当たりにして、筆者は子どもを育てるという意識の低さを痛感することとなった。

授業のオープンエンド化に学級づくりは不可欠である。

授業を開いて終えるという授業形態だけでは、授業のオープンエンド化は語れない。

第5節第一節「教材が子どもを動かす」は飛び込み授業でも可能な実践である。しかし、学級づくりが行われていれば同じ教材でも子どもの反応が大きく違うことは言うまでもない。

学級づくりにおける本来の目的は、学び合う集団を作ることである。

心の通い合う、開かれた集団づくりである。

それがしっかりと築かれた学級集団であれば、子どもたちの追究は友達とのつながりを経ながら深まることができるのである。

授業づくりのための学級づくりではない。どちらも支え合って存在する学びの共同体のための授業づくりであり、学級づくりである。

学級とは、一言で表せば「歴史の共有の場」である。今を起点とした未来へ、そして過去に向かっての歴史を共有する場なのである。

クラスの友達と関わって、個人的に子どもたちは様々な出来事を経験していく。

その子の良さを認め合うとは、過去の失敗をいかに今につなげていくことができるかなのである。長所を認め合うことの大切さが言われている。多くの場合、それはプラス面の肯定である。その個人内において、または全体の中での目立って良い所を認め合うことである。そうすれば、その子の短所もやがては小さなものへと変わっていくと。筆者も最初はそう考えていた。

しかし、それだけではいけない。

過去の失敗などを、いかに今の中で肯定的に捉えていくことができるようにするかが大切なのである。

「あの時、A君は……をしなくて良く注意されたけど、今のA君は違う。しっかりと自分から行っている。」

全体の中では目立たなくても、その子の歴史の中では大きく成長していること、その事実を認め合うことが大切なのである。成長の自覚。つまりは、マイナスから0へのことも大きな成長と捉えるのである。0からプラスへの成長ばかりが認められるべきではない。飛び抜けた面ばかりが長所ではない。その行為だけでの評価でもいいけない。そうなることができた、変わろうとした、変わり得たA君の内面をこそ認め合わなければならないのである。

これらが前提となっていれば、子ども同士のいざこざ、勝手な振る舞いによる問題などは、学級の全体の間にもさらけ出すことができる。小さな成長、行いでも前向きに取り組みだした子への認め合いが存在すればである。

前の失敗を肯定的に捉え、模範として繰り返し強化していくのである。

4月、授業中うるさくて落ち着きのない子がいた。当然、クラスの中では嫌われ者的存在となっていた。しかし、学級のまとまりとともに勝手なことをすることが少なくなって

きた。それでも全体の中では未だにうるさい。その子へは、
「前はあんなにうるさくしていたのに、今はこんなにがんばっている。さすがです。」
と教師がその変化を認める。すると、
「そうだよ。C君ががんばっているよ。」と友達から認める言葉が出てくる。そして、その子の良い面へと関心が向く。
「掃除の時もC君ががんばっているよ。」 「そうだよ。」
『そうなの。それはすごい。』
勝手なことをしていつも叱られていた子が、全体の中でほめられる。その子の小さな成長が認められた。前の失敗が今の肯定を生んでいる。
「でもね、給食当番の後かたづけを忘れていたよ。」
「そうだよ。」

ちょっぴり照れながら頷くC君、友達の非難の言葉も素直に認められる。学級集団の中に彼の存在がしっかり認められていれば、友達の声は届く。

どんなに否があっても、その場のその子の良い所だけをほめるという人もいる。そうすることがその子を認めることになる主張する人もいる。しかし、それはうそである。教師とその子のつながりを保つためだけであればそれもいい。しかし、それは学級集団を見ていない。子どもたちは見ている。教師の上辺だけのその場のつくろいとしてじっと見ている。不正に対してはしっかりと叱り、ほめるべきことにはしっかりとほめる。その両面が必要なのである。時には全体の間であっても大声を出すことは必要なのである。子どもの良い面だけを見て、今の一時的な平和をつくろってはいけない。

その子の良くなかった所をしっかりと全体の間で説明し、どうすれば良かったのかという方法を全体に投げかける。方法論でその子の行動を捉え直させる。その行為を止めさせるために行うのであって、止めようと努力している子へは教師は全幅の信頼を表す。その信頼は子どもたちに肌で伝わっていく。それが集団である。

叱るべきはその子の行為であり、その子の人格ではない。どんな小さな子であってもそれはよく分かる。

お互いの良さを認め合うというのは、そういうことである。

これは、調べ学習の発表で、互いの良い面を捉え、学び合うというのと同様である。

すばらしい内容を発表したF君と、その発表を聞いて自分の考えを変えたG君、その両者に優越をつけることなどはできない。

開くという視点で考えれば、

第5章第一節は、教材に対する心の「開き」であり、

第二節は、問い続ける自分への「開き」であり、

第三節は、友と学び合うことへの「開き」と言える。

それらがあってこそ、学び合う集団、つまり学びの共同体は存在する。

学び合う集団をどのように築いていくかについて、次節で筆者の本年度の実践から述べていくことにする。

第三節 学び合う集団づくり

子どもの姿を捉えながら個性を生かした学び合う集団を築いていくにはどのようにすればいいか。

本年度、3年生（学年2学級編成。男子16名 女子14名 計30名）一学期での筆者の実践から述べていく。

①クラスは明るく

言うまでもないことであるが、子どもたちは一日の中で起きて生活する大半を学校で送っている。そのほとんどを教室で過ごしている。

学級の雰囲気は、子どもたちのすべてに表れる。また、逆にすべてを表している。みんなまで笑い合える学級は、温かく知的な集団である。多くの場合、その学力も高い。

学級の雰囲気は、学級通信などを使わずにも子どもの様子で保護者に伝わるものである。

クラスの中が明るいと、子どもたちは生き生きと過ごし、個性を発揮できるようになる。

学級編成後の子どもたちの4月は、みんな、いいことをしたい、がんばりたいという新しい自分づくりに集中する時期である。1つの行動に善悪両面の解釈ができれば、進んで善と受け止めてあげることによって、この時期の子どもは安心して伸びることができる。

また、そういう時期であるからこそ4月当初は、教師が率先してクラスの中に多くの笑い、笑顔が生まれるように努力することが大切である。みんなでお腹をおさえて笑い合うことの楽しさを味わわせることができる一番の時期なのである。

小さな失敗は笑って許し合える雰囲気がなくして、教師が怖い顔で何度「失敗は成功のもと」と諭しても子どもたちが受け入れるはずがない。教師がみんなの前で失敗して見せて、初めて子どもたちは安心するのである。

子どもたちに笑顔を導きたいのであれば、教師がまず笑顔を惜しまないことである。

楽しい授業は言うまでもない。一時間に一回は大声で笑える場面をつくりたい。

学級通信の教師のコメントは肩肘張らずにくだけたものとする。子どもたちが毎日書いて家庭に持ち帰る連絡帳には、ユーモアたっぷりの楽しい内容を書くようにする。

笑いは安定と落ち着きを導く。また、活動のパワーを生み出す。友達とのつながりを温かくする。

勿論、腹の底からの笑いとは違って、相手をバカにしたり、傷つけたりする笑いには毅然とした態度で臨まなくては行けない。子どもたちは敏感である。

大声で笑い合うことができること、4月における筆者の学級担任としての第一の目標である。

3年2組学級通信ポコポンNo.1

4月9日（金）より

4月8日（木）

朝、教室に向かうと、もう元気な子がたくさん待っていました。

私が、何か始めると、脇から手伝ってくれる子がたくさんいます。

下駄箱の名前のシールの字をまちがってしまったので、シールを貼り替えに行こうとすると、瑛里加さんがカッターを持って行ってくれました。下駄箱まで、ぞろぞろとシールの張り替えに行きました。

朝自習は国語の教科書を読むことにしました。

(この時期だから、ふらふらと立ち歩いてしまう子がいるのだろうか?)

と思いました。しかし、打ち合わせが終わって職員室から戻ってくると、みんな静かに本読みをしていました。立派な3年生だなと思いました。

日直の浅野目拓くんと荒木理美さんにあいさつの仕方を教えてもらいながらみんなでしました。どうも、ずれてしまう人がいました。困ってしまいました。何度かやっているうちにできるようになりました。さすがでした。(私です!)

健康観察をしながらお話をして、提出物を集めて、紙の集め方の確認をすると、あっという間に1時間目が終わってしまいました。どうも、話が長くなっていけません。みんなが笑ってくれるものだから、おまけをしているうちに、話がどんどん変な方へ進んでしまいます。石井智大くんが下を向いていたので頭がおもたいのかなあと思つてのぞきこんでみると、笑いすぎて下を向いているのでした。

大きな声で笑える子は健康な子です。体全体で笑える子は、心の安定している子です。みんなと一緒に笑えること、笑いあえることは、クラスの中で一番大切なことかと思えます。

おもしろい話も教えてもらいました。それは、朝自習の終わった後のことでした。

「先生、国語の本が小さくなったので、(勉強することが) 少なくなったのかなあと思つたら、字が小さくなっていました。」 「たくさん書いてあったよ。」

石垣陽平くんと太田克磨くんが楽しく話してくれるものだから、うれしくなってきました。そういう驚き、大人になるたびにどこかにおっことしてきたものです。

国語の教科書が小さくなったので、ひょっとして勉強することがすくなくなったのでは……そういう驚き、そして発見、すばらしいなあ。来年は、さらに「厚くなった!」と感じるのでしょうか。

ちょっとしたことに、その子の感性が伺えます。

②教室でのありのままの姿を家庭に知らせる

教室での子どもたちの様子を家庭に知らせる。

心温まる子どもたちの活動を具体的な姿を通して伝えていく。

集団づくりとは直接的には関係ないようであるが、学校の様子を家庭に知らせることの意義は大きい。筆者は自分が親となり子どもを学校に送り出すようになって初めて分かったことである。教師の目からというフィルターのかかった事実ではあれ、今学校で何をしているのか、どういう子がいて、どのように暮らしているのか、それを知った保護者は、とりあえず安心する。その安心は、子どもの安定につながる。それらが学級づくりには大きな影響を与えてくれる。

また、学級通信で授業の様子を知らせると、いろんな実物が子どもの手を介して教室に運ばれてくるという利点もある。授業の話題が親子の会話の中に生まれ、親の姿が子どもの口を通して教室に運ばれてもくる。授業づくりにおいても意味は大きい。

3年2組学級通信ポコボンNo.2

4月12日(月) より

暖かい春がやってきたようです。

3年生になつての2週目が始まります。

9日、先週の金曜日は身体計測がありました。黒板に視力をはかる紙をはって、順番にはかっていきました。

「上」「下」「右」……………

中には右と左が逆になっているような子がいたので、黒板に右と左の方向を書いてあげたら、ぴったりあたるようになりました。右と左……とっさには答えられないという3年生の様子を知りました。

疲れてきたので時々紙の変なところを指示してみました。

「上」「下」「あれっ？」……………（なにもないところを指示しました。）

「紙です！」（今野史彦くん） 『すごい！』

「右」「下」「……………」……………（これはどうかな？）

「磁石です！」（瀬野俊彦くん） 『すごい！』

「右」「左」「えっ」……………（どうだ？）

「黒板です！」（本間潤くん） 『うまい！』

なんと頭の柔らかい子たちでしょう。実におもしろい。

順番を待っている子は絵の色ぬりをしていました。時々さわがしくなると、須藤嵩文くんが「静かにしてください。」とみんなに注意してくれました。こういうのはすばらしいです。やがて、太田克磨くんも何度も注意してくれました。浅野目拓くんもがんばってくれました。呼びかけてくれる人がどんどん増えてくれるといいなあと思っています。

そういえば、この日の朝、教室のザリガニを見つけて、太田克磨くんが「ぼくが洗ってあげる！」と言って、流しのところで洗い始めました。

「先生、みどりのこけがついているよ。」

元気な克磨くんは、もくもくと洗ってくれます。みんなが克磨くんのまわりに集まってきました。

生き生きとした動きがそこにありました。

朝から、とてもいい気分になりました。

3時間目に『春』の話をしました。

登場したのは、深瀬舞さんが持ってきてくれた「ふきのとうちゃん」と、奥山明日香さんと今野史彦くんが持ってきてくれた「つくしくん」と、今野史彦くんが持ってきてくれた「みのむしさん」です。

実物を目にしてのお話はいいものです。

春の味、つくしとふきのとう。

初めて見たという子はいませんでした。しかし、どういうところにあるのかと聞くと、家の周りとか、原っぱとか……………。

『どうして、つくし畑とかふきのとう畑というのはないの？』

と聞くと、だれも答えられません。

『だれが植えたの？』と聞くと、

「植えなくても出てくるんだよ！」と口々に言い出しました。

『だれが種を植えたのだろうねえ？』

「植えなくても出てくるの。」

『どうして？』

こういう話し合いをしていると、いろんなことがわかってきます。

「先生、つくしの先の方から何か落ちてくるよ。」

石井亮太くんがそう言うので、ポンポンとたたいたら、つくしの頭からこなみたいなものが落ちてきました。見やすいように後ろに紙をおいてポンポンしてみました。「先生、黒い紙でして！」浅野目拓くんが言うので、黒っぽい紙を後ろにおいてポンポンしてみました。

「わあ一見える！」

「すごい！」

つくしの頭から出るこなに驚いていました。

「それが種なんじゃないの？」

『そういうみたいなものですね』

「へ～え」

「ふきのとうは、花が咲いたら食べられなくなるんだよ。」

「苦くなるからだよ。」

『そうか。じゃあ、このふきのとうは大きくなったらどうなる？』

「大きいふきのとうになるんじゃないの？」

『おもしろい！ でも、あるものになります。同じような味のものだよ。』

「……………」

『にている名前のものだよ。』

「ふ・き」

『そう、ふきになります。だから、ふきのとうの近くにはふきがでます。ふきってわかる？』

「ああ、かさになるやつでしょ。」

「苦いんだよね。」

「穴のあいているのでしょうか。」

「先生、そのふきのとうにも穴があいているの？」（克磨くん）

『えっ？』

すばらしい発想です。

みのむしの話を今野史彦くんにしてもらいました。史彦くんはたくさんのみのむしをかっているそうです。中になが入っているのかと聞くと、「うじむしみたいな虫だよ。」と教えてくれました。『見たことのある人はいますか？』と聞くと、5人の手が上がりました。私は見たことがありません。中でみのむしはいったいなにをしているのでしょうか？

「大きくなったらガになるんだよ。」

鎌塚真くんが教えてくれました。でも、いつ頃出てくるのかは、だれもわかりませんでした。でも、夏頃なのじゃあないかということになりました。

どうなのでしょう「ガ」くん。

『どうやって、木みたいのをくっつけるの?』と聞くと、高橋実央さんが、
「口から糸みたいなものを出すんじゃないの。」

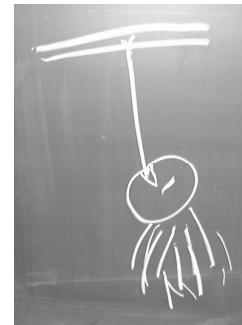
と教えてくれました。糸みたいなものでぶら下がっていると言います。

『その糸に自分はからまらないの?』

「そうだなあ。」

「自分は大丈夫なんじゃないの?」

高橋実央さんは、前に出てきて黒板にみのむしがぶらさがっている絵を描いてくれました。こういうのはすごい。



4時間目、お弁当を持って1組のお友達と一緒に中央公園に行きました。

途中、学校の周りをぐるっとまわって、春の植物の観察をしました。虫をつかまえてもいいよと言って、「わ〜い!」と喜んでいた子どもたちでしたが、いないことに気がついたようでした。

体育館の裏には、まだ雪が残っていました。

『どうして、ここだけ雪があるのでしょうか? ここだけ降ったのかな?』
と聞くと、「日陰だからだよ。」という言葉が返ってきました。さすがです。

中央公園に入る前に、エビつかまえを始めました。

驚きました。本当にいるのです。かじかもいました。

男の子も女の子も、道路におなかをつけて頭を側溝に入れて活躍しました。もしかのために教室から持っていった小さな虫取りかご（水槽みたいなものです）にたくさん入れました。

お弁当を食べてからもたのしそうにつかまえていました。浅野目拓くんと太田克磨くんはどっぷり浸っていました。拓くんが、おべんとうをつつんできたハンカチで水槽をつつんであげていました。日陰の方がいいからなのだそうです、感心しました。

教室に戻ってからも、また大変でした。

水槽のザリガニをバケツに移して、つかまえてきたばかりのエビを入れることになったのですが、ザリガニがなかなかつかまりません。やっと移動して水槽の中にエビを入れると元気にはね上がりました。

「かじかが共食いをしているよ!」

「先生、ぶくぶくがないとエビが死んじゃうよ。」

「水を入れるから、ちょっとどいて。」

こぼれた水をぞうきんでふいてくれる子もいます。ザリガニの動きを見ている子もいます。ガヤガヤとはしながらも、しっかり生き物と向かい合っています。

教室にはいろんなドラマがあります。

例えば……8日、家庭科室に教科書を取りに行った時、何気なく『このエプロンも持って行って』と頼みました。その日の夕方、教室を片づけていた時、黒板の脇のフックにきれいに番号順にエプロンがかけられているのに初めて気づきました。もう、こういうことまで考えてできる子たちなのだなあと、1人教室で感動しました。頼んだ以上のことまで、さりげなくやってしまうのですね。

石川彩香さん、渋谷柚香さん、高橋幸さん、清野瑛里加さん、日塔春那さん、ありがとうね！

③教師が作るべきクラスのルール

クラスのルールは、子どもたちみんなで決めた方がいい。しかし、安全に関すること、いじめの原因となるようなことに関しては、断固とした教師の態度が必要である。

4月においては、特に弱者を助ける教師の存在は強調しておかなければいけない。間違えうところが教室だ、と教師が主張するならば、間違えて考え直している子の存在する場を確保してあげなければならない。分かること、できることが一番でないということを強く主張しなければならない。

本学級には、ルールなど気にしないで勝手を通してきた男子（潤くん）がいる。腕力の強さと周りの子を無理矢理説得させてしまう言葉の巧みさをもっている。その子への4月の子どもたちの対応は、

○面倒なので相手にしない。（女子に多い）

○教師のいる場では集中的に文句を言う。注意する。（男の子の一部）
であった。弱者も自分の主張をさせなければならない。そのために「けんかをしなければいけない」という言葉で説明することになった。

とは言っても、4月の段階でそうそう子どもたちはかわれるものではない。だからこそ、教師がかわる方向を示唆していかなければならないのである。

3年2組学級通信ポコボンNo.8「教室」 4月19日（月） より

4月15日（木）

朝、柴田智義くんが水槽の中のエビ（中央公園でつかまえてきたものです）を見て「先生、食べたものが見えたよ。」と教えてくれました。透明なエビが、食べたものが透けて見えたようです。『じゃ、このあとだんだんおなかのなかで透明になっていくのかなあ？』と聞くと、智義くんは、また水槽を見に行きました。智義くんは、発見したことをいろいろ教えてくれます。

私は、教卓で日記を読みながら、まわりによってくる子のお話を聞きます。いろんな話をしてくれます。鬼ごっこをして、教卓のわきに隠れる子もいます。

そんな朝の一時、いいものです。教室の姿を感じます。

スイセンを太田克磨くんが、おたまじゃくしを深瀬舞さんがもってきてくれました。

2時間目の算数は「時間」の勉強をしました。

黒板に書いた問題を書き、『書き終わったら持ってきて下さい！』と指示しました。

終わった子がノートを持って来ます。当たった子にはハンコを押し、「算数の本を見て下さい！」と言いました。

まだまだ、一生懸命考えている子もいます。

間違いを指摘され、ちょっぴり寂しい顔で席に戻る子もいます。

ノートを持って並んでいる子。一生懸命考えている子。

……………クラスの中の動きに統一性がなくなってきました……………

すると、すると、終わった子の中にふらふらと立ち歩いたり、おしゃべりを始めたりする子がでてきます。早めに授業が終わった他の教室の子が廊下を通ると、ドアの方に行き、何やら話を始めようとする子もいました。2時間目の終わり時間まであと少し。ある意味では仕方のないことかもしれません。しかし、ここが大切なところです。

『そんなことでは、休み時間にはしない。おかしくないか。』

この教室で2度目の大声を上げました。すると、立ち歩いている子は急いで席に戻ります。教室中から物音が消えていきます。

本当は、こういうことはしたくないのですが、どこかでこういう時間が必要なときがやってきます。どの学年を担当しても、いつかはこの時間が必要です。

子どもに自由をとという風潮が強くなってきた今日、「自由」という言葉で、子どもたちのわがママがまかり通ってしまっている光景をよく見かけます。

静かになった教室の中に、2時間目終わりのチャイムがなりました。

でも、私は話を続けました。一年間教室で一緒にくらしていくなかで、とても大切なことだからです。

『早く終わってしまった人は、それでいい。でも、今一生懸命考えている子がいる。がんばっている子がいる。自分が終わったからといって、うるさくしたり、ふらふら動き回っていたりしたら、がんばろうとする子はどうなる。何でもできる子は、みんなの中には一人もいない。得意なことや得意でないことが必ずある。』

自分が得意でないことをがんばろうとしたときに、他の子が、早く終わったからといって勝手なことをしていても、それでいいのですか？ がんばろうという気になりますか。早く終わった子は、どうしていればいいのですか？』

これは、落ち着いて考えれば、だれにでもわかることです。また、そうあってほしいと願っているはずのことです。

私の話をうなずきながら聞く子の姿が多く見られました。私は、この瞬間に、子どもの生きる力を感じます。それは、学力というものとは別のものかと思います。しかし、本当は、これが大きく伸びる土台となっているのです。学力も含め、すべての面において。

中間休みは遅れて始まりました。

3時間目、2つの話をしました。

①困っていたりがんばっている子がいたとき、他のお友達はどうすればいいか。

2時間目の出来事を例にしながら話しました。

「静かにしてあげる。」

「助けてあげる。」という声が聞こえました。

②「～して」「～しなさい」と友達に言う人がいたら、どうすればいいか。

そういう子の言う通りに、何でもしてあげたらいいのかを話しました。

すると、

「そういうのは命令って言うんだよ。」

「だめなことなんだよ。」

『そうだね。そういうときは、いやだと言わなければいけないね。けんかしなければい

けないね。』

「……………」

けんかはしてはいけないと教えられてきたからでしょうか。

『命令をしなくなったら、お友達になればいいんだね。仲良くなるための、けんかは、しなくちゃね。』

「そうだね。」

子どもたちの中に笑顔が戻りました。

中学年の子たちは、意見の違いや好き嫌いの違いなどから、よく友達とぶつかります。ぶつかる中から、相手を知り、自分を知ることになります。そのぶつかりをとりさっての一時的な平和は、成長を深めません。言葉は悪いのですが、戦い、そして仲直りする方法を身につけさせなければいけません。

『なかよく、けんかしなければいけません。でも、これは、逆にしてはいけません。命令をする子に優しく仲良くして、困っている子とけんかするのは？』

「だめだよ、それじゃあ。」

最後は、笑いながら、楽しい話になってしまいました。

何度か、繰り返しながら確認していかなければいけないことかと思います。

「学級づくりは、授業づくりのために行うとおもってきたのですが、この頃そうではないと思うようになってきました。授業は学級づくり（友達づくり）のために行うのではないかと。」

昨年、筑波大学附属小学校の公開研究会の話し合いで露木和男先生が話されたことです。印象的な言葉でした。

4時間目、体育館で体育をしました。手つなぎ鬼を学年でしました。最後は倒れてしまうほど、体育館中を走り回りました。ものすごい運動量です。その後、ボール運動、そして、ドッジボールをしました。

整列係の本間潤くんが、先頭に立ってがんばってみんなを並べてくれました。みんなすばやくきれいに並ぶことができました。潤くん、さすがじゃ！

昼休み、体育館でドッジボールをしました。1組と2組がまざって2つのチームに分かれてしまいました。まだまだ小さいと思っていたのですが、なかなかどうして強いボールを投げてきます。私は3回当てられました。いや～まいった！ 果敢に向かってくる男子たち。たくましく育ったなあ！

でも、外野の私にボールを当てるすごい子もいました。まいったなあ。生まれて初めて外野でボールを当てられました。オホホのホ～

5時間目、屋上から学校の回りを見ました。社会の勉強です。しかし、山の景色や風の音、コンクリートの暖かさなどをみんなで確認していると理科の勉強にもなりました。屋上の青空の下で国語のわかばの詩を大きな声で読みました。伸び上がりながら体全体で声を出して、とてもいい気持ちでした。

6時間目に屋上で感想を書きました。たつぷりと活動した「動」の後の「静」は集

中します。20分間、みんな、集中して書いていました。

教師の方針を強く子どもたちにおろしていくことへの批判が流行している。

少なくとも安全、いじめ、弱者への対応、集団生活でのルールについては教師の明確な指示が必要だと筆者は考える。すべてを子どもの意に添うようにとすることが子どもを受け入れるということではない。そうした誤解が学級崩壊へとつながっているように筆者には思われてならない。

④子どもの動きに合わせて

3年2組学級通信ポコボンNo.9 「青空」 4月20日（火） より

16日（金）教室にボケの花とさくらのつばみを浅野目拓くんが、こうばいの花を野勢諒子さんが、さくらのつばみを横尾沙友里さんがもってきてくれました。春がどんどん教室に訪れてきました。
（明日香さん、はいピース！）

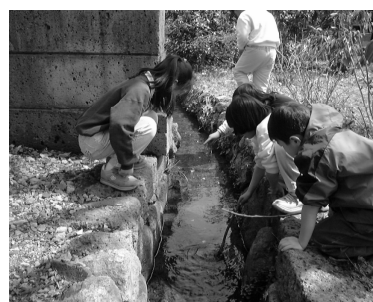
中間休みにたにしつかまえに行きました。前の日から奥山明日香さんが「先生、行ってみよう！」と誘ってくれたので、楽しみにしていました。

明日香さんを先頭に、1組2組まざって約20人で行きました。

驚きました。たにしがいました。どうしてこんなところに……と驚きました。

さらに驚いたことには、天野成也くんが貝をひろいました。どこから流れてきたのでしょうか。清野瑛里加さんと阿部浩幸くんと太田克磨くんと奥山明日香さんが、ヤゴをつかまえました。帰り道、これをどこで飼うかと話しながら来ました。

「先生、このまま3時間目もつかまえていようよ。」という理美さんの声に、のどまで出かかった『うん！』という声を『今度またみんなで来よう』と言い換えました。それ程、楽しい一時でした。



昼休み3年生の多目的室でハンカチ落としをしました。1年生の時、



みんなでしたことを思い出しました。あの頃は、ゆっくり走っても大丈夫だったのに、今はがんばって走っても追いつかれそうです。おなかのなかで、食べたばかりの給食が踊って、とってもいい気持ちです。子どもたちのおなかの中は、どうなっているのでしょうか？

いいなほ! 14日(水)のそうじが終わって5時間目が始まろうとする時。教室のごみ箱にはたくさんのごみが入っていました。それを見つけた今野史彦さんと須藤嵩文さんと浅野目拓くんの3人は、「捨ててきてあげる！」と大きなごみの袋をかかえて持って行ってくれました。

(すごいことだなあと思いました。)

教室を出ていく3人を見ていたとき、背中の方で動く人がいました。何かを持ってきたのです。ごみ箱に入れる新しい袋を教室の後ろの方から持ってきてくれたのです。

それは、実に自然な光景でした。

その人とは、高橋幸さんです。幸さんの机は一番前です。わざわざ教室の後ろまでとりに行って、当たり前のようにごみ箱に入れてくれました。そうじが終わって5時間目が始まろうとするざわついた教室での出来事でした。

気がついた人が、自然に仕事をしてくれることは、素晴らしいことです。

16日の給食の後かたづけの時間にも素晴らしいことがありました。

『今日の給食当番で1人後かたづけをするのを忘れてしまった子がいました。まあ、それは誰にでもあることだから、いいです。では、その残ったお皿を誰が持って行ったでしょう？』

「先生でしょう。」 「きっとそうだ！」

『先生は、おぼんを持っていったので、お皿まで持てませんでした。』

そこまで話すと、石井智大くんが、「ぼく、だれが持っていったか知っているよ。」と言いました。他の子は、誰も気づいていませんでした。

後かたづけの時、給食台に残ったお皿を見て、私が『これ、だれが持ってきたのかなあ？』と言いました。(準備の時持ってきた子が後かたづけでもっていくことになっています。)

その時、奥山明日香さんが、「私が持って行ってあげる！」と言ったのです。明日香さんは、一度給食室に自分の分を持って行って、教室に戻ってきたところでした。また行ってくれたのです。

その場面を、智大くんは見ていたのです。

『智大くん、その時、どう思った？』と智大くんに聞くと、智大くんは、

「いい人だなあと思いました。」と言いました。

すてきなことだなと思いました。

自分から持って行ってくれた明日香さんも、その場面を見て「いい人だ」と思った智大くんも！

友達とクラスで同じ時を過ごすということは、こういうことではないかと思います。

誰かの失敗を誰かが補い、その姿をすばらしいことと感じ、見届ける友がいること。
そのすべてに関わり合えるということ。
その場は誰にでも与えられているのです。
つながりが生まれるための誰かの失敗は、時には必要なことです。
忘れられた「しきり皿」が、すてきな話をつくってくれました。
失敗がすてきな話を作り出す。それは、そこにみんながいるからです。
こういうドラマを見ることができるのは、教師冥利に尽きます。
子どもたちから教えられる一時です。

奥山明日香さんが「先生、たにしつかまえに行こう!」というので、となりの1組の子どもも誘って中間休みに行った。およそたにしなど存在しないような小さな側溝であったが、しっかりとたにしをつかまえることができた。明日香さんの生き生きとした姿が印象的であった。

高橋幸さんや奥山明日香さんの行動を見逃さず、全体の場合に1人の事実として広げていくことの意味は大きい。教師がこうしなさいと示唆して行動させてから認めることと、子どもの小さな行動をみんなに広めていくことによって認めること、その兼ね合いは実に難しい。待つことは大切なことである。しかし、待っていてもどうにもならないこともある。

小さな行動を全体に広め認めていくと、その裾のは着実に広がっていく。

そして、こうした教室での出来事は、子どもたちのつながりを深め、新しい出来事を生じていくことになる。

3年2組学級通信ポコポンNo.4 1 6月9日(水) より

すごい! 終わりの会で、良かったこと、楽しかったことの発表をしています。
この日には、いつもとちがった発表がありました。 すごいことです!
「今日の給食の後かたづけで、食カンを運んでくれたのはだれですか?」
後かたづけを忘れてしまった石井智大くんが、みんなに聞いたのです。
忘れることは、だれにでもあります。問題は、その後です。
高橋実央さんと神尾美紀さんが手をあげました。智大くんは、「ありがとう」と言っておじぎをしていました。
こういうことが素直にできる智大くんはステキだなと思いました。
そして、のこった食カンを持っていつてくれた実央さんと美紀さんも!
私は、とてもいい終わりの会だなと思いました。 ランラン!

⑤授業と生活のつながりを大切に

3年2組学級通信ポコポンNo.1 7「生活の中から」 5月1日(土) より

1つの日記から授業が大きく左右されることがあります。
生活の中のほんの1つの出来事がです。 26日の社会の授業より

きょうの朝の6時ごろ、おとうさんは、中央公園のせいそうをすることになっていましたが、雨がふってできませんでした。おとうさん、ごくろうさま。
4月25日(日) (高橋実央さん)

社会の「花いっぱい運動」の学習をしているときでした。

19日の授業の後、岬さんが、「中央公園の桜を、いったいだれが育てているのか？ だれがしょうどくしているのか？ だれが水をやっているのか？」と日記に書いていた話題を出したときでした。

実央さんが、この日記に書いたことを発表したのです。（私は、朝のうちに実央さんの日記を読んでいたので、どうなるかなと楽しみにしていました。）

『実央さんのお父さんは、公園のそうじをしている！』

「へえ～」 「ぼくのうちもかなあ？」

『じゃあ中央公園に一番近い柚香さんのおうちの人は？』

柚香さんは、迷いながら「行っていないと思います。」と言いました。

「先生、ぼくのお父さんは三角公園の草取りに行ったことがあります。」

須藤くんが言いました。

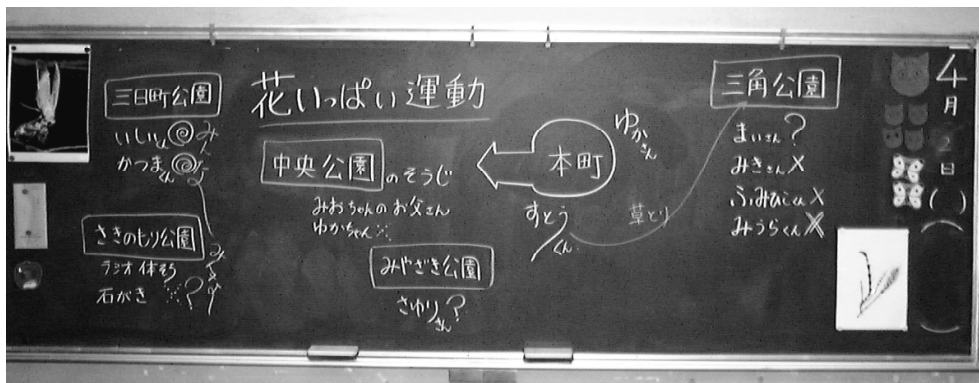
『須藤くんのお家は、中央公園の方が近いのに、どうして？』

「えっ？」

『三角公園に近い舞さんは？ 美紀さんは？ 史彦くんは？ 三浦くんは？』

公園のことは、どこかのだれかがしていると思っていたのに、自分の家族がということになって、不思議な顔をする子が出てきました。

舞さんは？ 美紀さん、史彦くん、三浦くんは行っていない、と発表しました。すると、三日町公園に近い亮太くん、克磨くんはみんなでそうじをしていると発表しました。さきのもり公園に近い石垣くんは、ラジオ体操のあとにみんなでゴミをひろったことを発表しました。みやざき公園の沙友里さんは、？でした。



おもしろくなってきました。

教科書に書かれていることが、どこかのだれかの話ではなくなってきました。急に現実味をおびてきました。

このあと、子どもたちはどうするでしょうか？

どうするのが「学習」でしょうか？

きょう、まんてん先生をしたあと、じてん車でみゆきちゃんの家へあそびにいきました。行くとちゅうに、すみれがたくさんさいていました。むらさき色です。そして、三日町公園であそびました。三日町公園の桜は、もうほとんどちっていました。桜の木の下に桜の花びらがいっぱいちっていました。でも、桜の木からはなれているところは、少ししか花びらがありませんでした。

それから、家に帰って、おじいちゃんに、
「ちゅうおう公園の桜の木は、だれが世話しているの？」
とききました。そしたら、おじいちゃんは、
「この桜の木は、ひがしねしやくしよの人たちが世話しているんだよ。」
と教えてくれました。それから、
「おじいちゃんは、ちゅうおう公園の草とりや、そうじをしているの？」
とまたききました。おじいちゃんは、
「しているよ。ぶらくで、そうじや草とりや草かりをしているよ。」
と教えてくれました。おじいちゃんが、西だての区長をしていた時は、毎日のように草とりやごみひろいをしていたそうです。先生、ゆかは、はずれでした。先生の
当たり！ 4月26日（月） （渋谷柚香さん）

「花」を通して、理科の学習と社会の学習がつながってきました。
柚香さんの日記は、生活を通して学習している姿がよく表れています。

授業によって子どものつながりは深まり、思考の幅が広がっていく。

学び合う集団づくりは、個々の子どもの生活にある体験をつなげることによって生まれる。自分の体験に気づかせ、それを表現させることが出発点となる。そして、お互いの共通点、相違点を焦点化させることによって、授業を通して友達を知り、お互いの存在を意識するようになっていく。

教材のもととなるものは、子どもたちの生活の場にいくらでも存在する。そこに気づかせ、学習を自分や友達とのつながりからより身近なもの意識できたときに、学習意欲は高まっていく。

子どもが無意識につぶやいた言葉・書いた日記を授業の場に登場させることによって、学習と生活の距離は接近する。その意味からは、一人一人の生活をとらえ教材のつながりを意識しながら単元づくりをしていくことの意義は大きい。

生活の場をどのように授業の中に登場させていくか。その事実で子ども同士のつながりをどのように築いていくか。教師の大事な役目である。

⑥子どもの活動への価値付け

汚れながらも遮二無二活動する子の姿が少なくなっている。楽しみながら活動そのものに自己を没頭させているというよりは、活動の結果・他者からの評価を気にする傾向にある。自分のしていることに意味をもちたくなる。

活動そのものの意義、成功失敗を問う前に、活動そのものの楽しさを共有させ、その過程を楽しませたい。

学習の仕方でも同じである。

教師が知識の量だけを子どもに誇り、先生は何でも知っているということだけを強調し過ぎると、子どもの目指すところも知識の量だけ、つまりは成功失敗の結果だけの評価となってしまう。

過程を楽しむことを子どもと共有できる教師になりたい。植物の名前をいかにたくさん知っているかを誇るのではなく、植物の観察を子どもの視点で一緒に楽しめる教師でいた

い。そこからは、物事の結果だけに左右される一面的な捉え方しかできない子どもではなく、過程を楽しむ生活を楽しむ子どもが生まれてくる。

3年2組学級通信ポコポンNo.27「水槽物語」 5月25日（火）より

12日、生き物係が教室の水槽の水かえをしてくれました。
 どうするのかなと楽しみにしていました。
 水の入った水槽は、重くて持てません。
 「先生、持てない？」
 『だめだ、これは。たくさん給食を食べても、これは無理だ！』
 「どうしようか……………」
 生き物係さんたちは、金魚を移すために、まず中間休みに中庭の池の水をバケツに持ってくるようになったようです。
 一生懸命にがんばっていました。
 と、その時、浅野目拓くんのズボンがぬれてしまいました。
 「先生、ぬれちゃいました！」
 『ごくろうさん。運動着に着替えるか？』 「はい！」
 金魚のお引っ越しは終わりました。
 昼休み、今度は水槽の中の水をとることになったようです。どうするか。ちょっぴり意地悪かもしれませんが、私は日記のコピーをとりながら見ていました。
 くみ取る容器が小さいビンから、大きなバケツにかわりました。（いいぞ！）しかし、バケツは大きくて、水槽の中から抜けません。（さて、どうなるか？）
 さまざま工夫しながら、何とか水をとることができました。
 「先生、このくらいならいいですか？」
 『うん、そのくらいになったら、先生が水槽を持ってジャーしてあげる。』
 「はい！」
 満足そうに仕事を終える顔、いいものです。
 この時、拓くんの運動着がぬれてしまいました。もう着替えるものはありません。さてさて…………。「ぬれちゃった！」そう言いながら、拓くんは、ベランダに干してあったズボンにはきかえました。中間休みにぬれたのが、もう乾いてしまったのです。
 もう、春です。
 水の少なくなった水槽は、放課後、今野史彦くんと奥山明日香さんが、スポンジでゴシゴシをしてくれました。水槽についたこけがとれて、とてもきれいになりました。
 たった1つの水槽の水換えをめぐって、教室の中では、いろんなことがおこります。
 生き物係の浅野目拓くん、鎌塚真くん、阿部浩幸くん、今野史彦くん、天野成也くん、三浦智樹くん、ありがとうね。
 金魚くんたちが、気持ちよく泳いでおりました。
 生きる力って何かな？
 考えてから行動することも大切だけど、
 考えることも大切だけど、
 理屈ばかり言っていてもしようがない。
 まず、行動してから、さまざま工夫が付け足されて、自分たちの力でどうにかしてい

く。そういう所にもあるんじゃないかな。

いや、世の中の多くのことは、そっちの方が多んじゃないかな。

真っ黒になって遊ぶ姿。

汚れるのも気にかけずに一生懸命に取り組む姿。

私は、そういう所に生きる力があるのではないかと思います。

文部省が21世紀の学校教育の大きなテーマとして掲げている「生きる力」

それって、子どもたちが学校の中でもっとも自然に活動する中にあるような気がします。あれこれ仕掛けを思いめぐらす前に、私たち教師が、子どもたちの活動の邪魔をしないようにしなければと考えています。

昔は、あらゆるところでそれがあったように思います。

一生懸命に取り組む拓くんの姿を見て、そのたくましさとともに、「生きる力」を感じるのです。このエネルギーは、すべての活動の源になります。

今度は、ホースをあずけてみようかな。

もっといい工夫があるかな？

新聞系の太田克磨くん、柴田智義くん、須藤嵩文くんが活動を始めました。

新聞の4コマまんがをはって、たのしい新聞をつくってくれました。

明るく意欲的に活動する拓の活動を中心に載せた。拓の活動そのものを楽しむ姿が学級に与える影響は大きい。

3年2組学級通信ポコポンNo.35「諒子さんの大発見」 5月29日（土）より

諒子さんの大発見！

20日（木）理科の勉強でひまわりとオシロイバナのたねの観察をしました。その後、中庭に行って花壇にたねを植えました。早めに終わった子は、中庭の観察をしていました。しばらくぶりの中庭で元気に走り回る子もいました。

昼、給食の準備をしていた時、諒子さんが、

「先生、机の中のたんぽぽのわたげが、ひらきました。」

と話しかけてきました。『えっ？』何がどうしたのかわかりませんでした。

諒子さんのお話を聞いてみると、とてもびっくりすることでした。

終わりの会で、諒子さんからみんなにお話してもらうことにしました。

「中間休みに中庭でとってきたたんぽぽのわたげが、ひらきました。」

ひらいたわたげを手にもって、諒子さんが説明してくれました。

みんなは驚きました。

そんなことがあるのでしょうか。

「机の中はあったかいので、ひらいたのではないですか？」（荒木理美さん）

「机の中は暗いからひらいたんじゃないのかな。」（須藤嵩文くん）

いろんな意見が出されました。

たんぼぼのわたげのひみつです！

それにしても、諒子さんの発見。すごいと思います。

この日の日記には次のようなものがあった。

今日、学校からかえってくるとちゅう、タンポポをひろいました。**りょう子ちゃん**は、つくえにいれていたらわたげになったっていったけど、わたしはカバンにいれてみました。家に帰って、きこちゃんとでんたくあそびをしました。そして、かえってきてカバンを見てみたら、しおれていました。どうしてひきだしにいれておくとわたげになって、カバンにいれるとわたげになんないのかなあ。ふしぎ！ ふしぎ！（清野瑛里加）

きょうの4じころ、かにさわのおばちゃんと、うちのおばあちゃんと、お母さん、いもうとのまいで、はたけにいきました。そこのはたけで、わたげをみました。そのわたげは、ふつうのわたげよりすこしかわっていました。**きょうは雨はふったので、たんぼぼのわたげはつぼんで、天気がよくなるまでまっているんだな**とおもいました。つぼんでいないほうのわたげは、ふつうのわたげで、わたげの中にむしがあまやどりをしていました。

おかあさんが、「よくみつけられたね。」と言ってくれたので、わたしはなんだかうれしくなってきました。それに、そのわたげの中にいたむしが人のかおみたいで、バッタもいました。なんかおもしろいなーとおもいました。（石川彩香）

どちらも諒子さんの発見を意識したものである。

なかにわからとってきたたんぼぼのつぼみを、**つくえのなかにいれていたら、まんまるになりました**。さとみちゃんがいったみたいに、つくえのなかはあったかいんだとおもいました。

かめのそうじをしていました。わたしは、みどりがめとあそんでいたとき、おおきいほうのかめがいけにおちた。ばあちゃんが、そのことをおしえてくれました。いけをさがしてもでてこないの、すこしまっていました。それから、1じかんごろたって、水がきれいになって、それからさがしてみたら、そこにしずんでいたかめを見つけて、ばあちゃんがつかまえました。よかったなとおもいました。ばあちゃんにありがとうといいました。こんどもにげるとわるいので、あかいひもでむすんでおきました。またにげたら、もう1こむすんでやります。（野勢諒子）

いつもは数行の諒子の日記も、この日ばかりは数ページに渡っていた。

諒子は、物静かな子である。しかし、家庭では人よりも活発な子である。どうにかして彼女のつくった「学校での自分」の殻を壊したいという筆者の願いがあった。そのおりのことである。

教師に意を決して告げたたった一言を、終わりの会で発表させた。子どもは事実の発表はしやすい。（そこに自分の考えが入ると難しくなってくる。）

真っ赤になって質問に答えていた諒子ではあったが、やがて緊張もとけて、友達の質問に元気に答えていた。

たかがたんぼぼ、しかし、教師がそのすごさを強調しその場を設定すると、こんな小さなことでも自信をもって自己表現を始める子が存在する。諒子は、やがて自分から進んで

挙手して音読をすることもできるようになっていく。

自分がみんなを動かすことのできる存在であると意識できたとき、つまり自己原因性を自覚できたとき、子どもは伸びる。教室中をそういう子だらけにしたい。

その場を自力で築くことのできない子をどのようにして育てていくかが教師の役目である。子どもの良さ、小さな成長を見つけ、全体に広めていくことが大切なのである。

自信を得た諒子は、次のような動きを見せるようになる。

3年2組学級通信ポコポンNo.43 6月8日（火）より

「メロンの種を水に入れていいですか？」（野勢諒子さん）

これだけで、意味がおわかり頂ければ、すごいものですが……。

諒子さんが持ってきたメロンの種とは、給食についてきたメロンの種です。

そして、水に入れるとは、昨日から始めた、教室のロッカーの上に並んだ「水栽培中の種」と同じように水栽培にしていいいですか、ということです。

すばらしい考えなので、「どうぞ！」と諒子さんに答えました。

小さなメロンの種、これからも芽がでるのだろうかという見方。大切にしなければいけないと思います。

（水栽培は昨日31日から始めたのですが、見本を29日に作っておきました。見本のヒマワリの水栽培は、なんとこの日に芽が出ていました。3日で芽が出るのでしょうか。現実なので驚くだけなのですが、水の力って本当にすごい！）

給食を食べ始めた、教室が静かになる一時のことでした。

5分もすると、「先生、メロンの皮、おいしいよ！」という声が教室の後ろの方から聞こえてきました。メロン1つにも、その子の人生を感じる一時です。

諒子の一言が、クラスの子どもたちの種の水栽培に拍車をかけることになった。

子どもの活動は、お互い影響し合いながら進んでいく。そこには、互いの活動、存在への認め合いがある。

⑦子どもの姿

楽しいことにはとことん熱中する子どもたち。

3年2組学級通信ポコポンNo.60「トントントン」 6月30日（水）より

24日（木）神尾美紀さんがあじさいの花をもってきてくれました。

あじさいは、この時期を表す季節の花です。朝、昨日の赤ネねこ漢字スキルの⑤の再テストをする子がたくさんいました。

日直の話に「コクワガタ」をもってきた浅野目拓くんが特別参加しました。

『4時間目は体育館でハンドベースボールをします。』 「ワーイ！」

いつもの光景ですが、

「準備をしていいですか？」

『えっ？』

何のことを言っているのかと思ったら、ハンドベースボールで使うベースを準備してもいいかということでした。その方が早く始められます。気がつくなあと思いました。

『いいことだね！』そう答えると、「カギもいいですか？」何と、体育館の2階の用具

室（ボールのかわりに使うまりがあります）のカギをとりに行くということです。カギは職員室にあります。一緒にとりに行きました。高橋幸さん、高橋実央さん、須藤嵩文くん、ありがとうございました。

体育が終わったら、ちゃんと職員室にカギを返してくれました。

立派になったなあと、おいしく給食を食べました。

ただ今図工では、ビー玉を使ったゲームを作っています。この日の5時間目には、釘打ちをしました。なれない手つきでがんばっていました。

コンコンコン……………

普段は2時間続きなのですが、この日は5時間授業なので、かなり不満気味。

『時間だよ～』 「あと5分」

『まあいいか……』 「やった～！」

『時間だよ～』 「もう？」 「あと少し」 『だめ！』

なかなかあきらめがつかないようです。止めさせるのにとっても苦勞しました。

25日（金）朝、そろそろ児童集会、……………あら？ いない！ どこに行った……………トントントン、トントントン、となりの教材室で並んで楽しく釘打ちをしていました。コマから釘に文明は進んだようです。

『集会だよ！』 「このままにしていっていいですか？」 『うん！』

体育館へ向かいました。音楽集会でした。

1時間目は国語。ありの行列の⑤～⑧の重要な文を選ぶ学習です。ヤドカリのすみかえから続けて説明文の学習をしています。かなり難しい問題をみんなで解いています。音読や漢字練習とは違った、思考力の働いた国語の学習ができるようになってきました。1時間目終了の時刻を5分延長して行いました。

休み時間5分（1時間目と2時間目の間の休み時間は5分間です）も5分間遅らせて取りました。

5分遅れて2時間目の授業が始まろうとしています。

始業時間はしっかり守るようにしていますが、この日は、教室にいる人数が少ないです。少なすぎます。

（便所にいるのかな？）と思うと……………トントントン、トントントン！

5分間の休みも惜しまずに釘打ちをしています。

子ども本来の姿なのですねえ。

中間休み、昼休みとよくもあきずに続けられるものだと感心してしまいました。しかし、終わりの会で、

「先生、今日これ持って帰ってもいいですか？」

『……………！』

さすがに言葉がなくなりました。このまま持たせてしまつては、土日と釘をうち続けて、しまいにはどうなることかと心配になったので、

『月曜日の6時間目にしよう！』 そう言ってなだめました。

「先生！ 全部打って、釘がなくなったら、どうするのですか？」

釘さえあれば、板中打つつもりなのではないでしょうか？

子どもの姿を再認識させられました。

トントントン！

(家でかなづちと釘はどこにしまっておりますか？)

きょうの5じかんめのずこうで、くぎうちをしました。くぎをうつときに、まんなかの木のぼうをつかってくぎをうちました。それで、なかなかうまくありませんでした。右にまがったり、左にまがったり、まえにまがったり、うしろにまがったりして、うまくできませんでした。でも、だんだんやっていると、5時間目さいごには、とてもうまくできました。**うれしかったな～。**

こんちゅうのずかんをみて、みのむしのつぎは、がになることがわかりました。それに、**おすはみのからでて、めすはずっとみののなかにはいっている**そうです。みのむしのオスとメスってふしぎだなあ。 6 / 24 (石川彩香さん)

メスって、かわいそうですね。ず～っとみのの中か……………。

実にのどかな子どもたちである。

教室の隣の教材室をすみかに、様々なことをしている。図工の材料をあずけると、ただひたすらに作り始める。

4月当初は、だるまさんがころんだや、ハンカチ落としをして遊んでいた。縄跳びの授業をしているときは、みんなで長縄跳びをしていた。理科の実験材料をあずけると、まだ授業で使ってもいないのに空気鉄砲で撃ち合いをして遊んでいた。

二学期になると「イスとりゲーム」をして、男女混ざって10名程度で入れ替わりに自分達でルールを決めて遊んでいる。

授業と遊びその境目は、休み時間を告げるベルの音ではなく、子どもが内面からどれだけ自由にその中に入り込んで自分達の世界に酔いしれるかなのだと教えられた。

3年2組学級通信ポコポンNo.7 2「ともだち」 7月19日(月)より

7月8日(木)国語の時間、希望者に音読をしてもらいました。真っ先に手をあげたのは野勢諒子さんでした。諒子さんが読み終わると石井亮太くんが「ギュッギュッというところが上手でした。」、神尾美紀さんが「、や。で休んでいました。」と感想を発表してくれました。2番目には天野成也くんがまっすぐに気持ちよく手をあげたので、読んでもらうことにしました。鎌塚真くんが「ゴーゴーと大きく言っていました。」、横尾沙友里さんが「カッコのなかがさぶたちになっているみたい。」、高橋幸さんが「、や。で止めていました。」、荒木理美さんが「ナレーターとカッコの中の声の大きさが違います。」と発表してくれました。3番目には乗り出して手をあげた三浦智樹くんに読んでもらいました。清野瑛里加さんが「カッコの中が男の子みたいでした。」、鎌塚真くんが「カッコとナレータの区別がなっていました。」、今野史彦くんが「カッコの中をなりきっていました。」、阿部浩幸くんが「自分のテンポの読んでいました。」、浅野目拓くんが「負けず嫌いなような声でした。」、横尾沙友里さんが「ギュッギュッ、ゴーゴーが本当みたいでした。」と発表してくれました。

良いところがより具体的に指摘されるようになってきました。

給食の後、コンテナ室で後かたづけをしていた私の所に具合が悪くなった子が来まし

た。5時間目に早退したのですが……、その子に教えてもらいました。
「水泳で見学していたとき寒かったんだけど、鎌塚真くんたちが上着をかしてくれました。」

『そうだったのか……。』

「教室で、今野史彦くんが、『熱を計ったら？』と言って体温計をとってくれました。」
『……。』

私がプールで水温や気温、塩素濃度を計っていたとき、コンテナ室で給食の後かたづけをしていたとき、子どもたちが様々に心配してくれていたのです。

担任の至らないところをみんなでカバーしてくれていたのです。

勿論、具合が悪くなった子、その子が普段みんなにしている行動が良くなかったらこのようなまわりの子の反応はありません。その子の存在感が、みんなをこのように動かすのですが……。それにしても、何と温かい子たちでしょう。

子ども同士のつながりを、このような時に感じます。

これが教室で暮らすということなのでしょうか。

5・6時間目は、図工のお面作りをしました。鏡を見ながら、いろんなお面ができあがっていきます。実に楽しそうに……。

おっと、この日の朝には、七夕集会がありました。クラスの願いごとの発表がありました。3年2組はみんなで声を合わせて発表（叫び？）しました。最初に太田克磨くんの一言で始まりました。

みんな（克磨くん）

大げやきのように（全員）

健康で（男子） なかよく（女子）

元気に暮らせるように 3年2組（全員）

出だしの克磨くんは、前の日にみんなで選んだ「クラスNo.1の大きな声の持ち主」でした。元気一杯の声が体育館に響きました。

子どもにおける「友達」の存在。

国語の音読での良かった所の指摘など、常に友達とのつながりを授業の中に位置づけてきた。それがいつしか教師の目の届かない所での子ども同士のつながりにも発展していた。

子どもをどこまで見取っているか。一教師の存在を改めて気づかされた。

⑧日記

筆者の情報源であり、授業づくりのもとであり、子どもたちの授業に対する評価でもある。授業のオープンエンド化を意識する前から筆者の実践の中核をなしてきた。授業がおもしろくないと子どもたちの日記には授業のことは登場しない。おもしろいことがあると、何人もその内容について書いてくる。子どもたちは実に正直なものである。

日記の書かせ方については第4章に述べてきた。重複を避ける。ここでは日記における保護者の反応を中心に述べることにする。

日記を始めるにあたって、4月当初に学級通信を通して、保護者には次のように説明してきた。

3年2組学級通信ポコボンNo.3 4月13日(火) より

日記を始めました！

12日、「れんらくちょう」と書かれたノートを配りました。日記帳です。

これから、ほとんど毎日家で書いてきてもらいます。(時々、書き方の勉強をかねて、学校で書くこともあります。)

書き方は簡単に説明しましたが、初めての子は、なかなか慣れるまで時間がかかると思います。でも、長い目で見ていきたいと思います。

私は、この日記帳に3つの意味を持たせています。

1つは、子どもとのコミュニケーション。

一人一人の子とのお手紙のやりとりのように、個人的なつながりを深めていきたいと思っています。

2つは、学習の生活化です。学校で勉強してきたことの続きを家でさらに調べたり、生活の中から学習をとらえ直すことができるようにです。

3つめは、書くことに抵抗がなくなり、文章表現力を高めていくことができるようにです。

できるだけたくさんの子の日記をおたよりで紹介していきたいと思います

そこで、お家の方をお願いします。

次のことをすると子どもは日記を書くことを嫌がります。つまり、伸びなくなります。

①誤字脱字を指摘する。丁寧に書けと言う。

②書いたものを他の子のものと比較する。

③内容についてとやかく言う。

①自分の考えやしらべたことを文に書くことを目標とします。誤字脱字は問題としていません。「先生が読めればいいから！」と子どもたちには言っております。(私は大概解読できます。)
「習った漢字を使いなさい!」「きれいに、ていねいに書きなさい!」は禁句です。書くことそのものが嫌になってしまいます。苦痛以外の何物でもなくなります。

②③競争ではありません。その子なりの書き方、表現の仕方があります。子どもさんの書いたものを讀んだときは、いいところをほめて、うなずいてあげてください。そうすれば、意欲が高まり、必ず伸びます。書くことが楽しくなった子は、ひとりでに力をつけていきます。

長い目で見守りください。

早い子は来月頃、遅くても7月には子どもたちの日記の中に学校で学習した内容が登場してくることになります。学校と家がつながって、実に多様な追究ができるようになるはずです。

担任した年に毎回お願いすることであるが、家庭でのことであるため保護者の姿勢による影響は大きい。今年度はこの通信を渡した日に次のような保護者のことばが連絡帳にあった。

連絡帳から(保護者の感想) 4月13日(火)

月曜日、日記を書くという事で、ノートをのぞいて見ると、

「何と、文章の中に漢字が一つしかない。1・2年で習った漢字がない！」

「習った漢字使ったら。」 「ここまちがってるよ。」

と口まで出かかっておりました。でも、その時、前に読んだ事のある「ヘレン・ケラーはどう教育されたか、サリバン先生の手紙」という本の文章を思い出しました。

「書くためには、人は書くべき物をもたねばならず、書くべき物をもつには、精神的な準備が必要で、**書く事が自然で愉快的仕事になるには、心が豊かになっていなければならない**。子供は、何か言いたい事をもつ前に書く事を強制される事が多すぎる。自己抑制する事なしに、考え、読み、話す事を考えれば、彼らは書かずにいられなくて、書くようになるだろう。」

それを思い出して、言う事を止めました。そして、学級通信を読ませてもらい、よけいな事を言わなくて本当によかったと思います。文章を書くのは、字が下手なせいか、連絡帳などには、今までほとんど書いたりしませんでした。でも、学級通信を読ませてもらい、書かずにはいられませんでした。子供もいつか今日の私の気持ちになってくれればなと思います。長くなって申し訳ありませんでした。字が下手ですみません。一番のコンプレックスです。
(野勢諒子 母)

そして、やがて、成長した子どもの姿が保護者を変えていくことになる。

いつもお世話様です。ポコボンに自分の子供の作文が載るとうれしいものですが、自分の連絡帳が載ったらもっとうれしくなりました。まるで子供もみたいです。今まで載った人は文章も意見もしっかりしており、感心していました。皆（保護者の方）こんなしっかりした文章をいつも書いているんだろうなと思っており、少々書きづらい所もありました。今、書いている時、辞書を開きながら書いていましたら、Sから

「お母さん、わからない字はひらがなで書いていいんだよ。」

と言われてしまいました。今後は、かっこつけないで肩肘をはらず書いて行こうと思います。子供といっしょに作文の勉強をさせて頂いている様でありがとう御座います。

4 / 28 (横尾沙友里 母)

3年2組学級通信ポコボンNo. 25「子供の目」 5月20日（木）より

サリバン先生の手紙で語られていることが「子どもの心の開放」であることは言うまでもない。その意味でも日記による子ども理解は大きい。さらには、その子の友達意識・学級意識が伺える。また、保護者の姿勢がその根底にしっかり存在している。

⑨ほめることと叱ること

ほめるときは事実をもってほめる。叱るときは、腹の底から叱る。

3年2組学級通信ポコボンNo. 62「ほめると叱る」 7月5日（月）より

長らく教師をしていると、自分の年齢の変化と共に、その考え方も変わってきます。また、担任した子どもたちの学年に応じて違ってきます。

「ほめること」と「叱ること」。

この兼ね合いは難しいです。

どちらかと言えば、私は子どもをほめることが多いのかもしれませんが。自分自身が子を持つ親となつてからは、その傾向が特に強くなってきたかとも思います。

子どもは、ほめられることによって意欲を持ち、前進しようとするからです。

ほめられて嫌な気のする人はいません。

人間同士の関係を高めるには、ほめることが一番かとも思います。

しかし、ほめられることだけで育った子どもは、どちらかというとたくましさに欠けます。支えがないと前に進むことができなくなる傾向にあります。きつく注意されたりすると、立ち直れないようになることもあります。

しかし、伸び伸びと、表情豊かな子に育っているという現実もあります。

叱られることに慣れている子は、どんなにきつく注意されても立ち直りが早く、ふまれてもふまれても起きあがってくるたくましい子が多いです。

叱られたり注意されたりしたときの子どもの反応を見て、叱られ慣れているか、ほめられ慣れているかが推し量られます。

私は、ほめることによって、子どもの意欲を高め、叱ることによって、たくましい子に育って欲しいと考えています。

ちょっとくらい注意されたからと言って、泣いたり、へそを曲げたり、ふくれたりするような子に育ってほしくないと思っています。

クラスの中は明るいにこしたことはありません。しかし、悪いことを見逃してまでも作り上げた明るさは意味のないことです。

ギャアギャア元気に騒ぐ時があっていい。

しかし、みんながシーンとなり、真剣に考える時間は必ず必要だと思ってます。例えば、何らかの問題があったときは、事後処理だけでおわすのではなく、なぜそれが悪いのか、どうしてBくんは叱られたのか、まわりで無関心でいた子はどうすればよかったのか、それを考えさせる場をとってきました。日々の問題をみんなで解決していくこと、その解決の場を共有することが、一番の生きた学習ではないかと思っています。

私は、教員になって最初の勤務校で校長先生からとてもよく叱られました。大きな職員室のはじからはじまで響き渡るような声で、思いっきり叱られました。当時は、なぜ自分が叱られるのかよくわかりませんでした。ふてくされたような時もありました。しかし、時間がたって、その本当の意味が分かってきました。

適当にほめている方が気が楽ですし、表面的には安定します。

しかし、自分で責任を背負って叱ってくれる人の存在の大きさに気づけたとき、どちらが真に相手のことを思った行動かということに気がつきました。

叱られてばかりの毎日はつらいです。

小学生にそれを理解させようとは思いません。

しかし、子ども主体という流れの中で、曖昧なほめ言葉だけに終始して、真にその子の直すべき点を指摘しないというのはおかしいと思うのです。

みんな笑顔で毎日を送りたい。でも、困った問題があるときは、みんなでじっくりその解決策を考えて、このつぎを視野に入れた話し合いをさせたいと思います。たとえそこに涙があっても、それを乗り越えていく力を育てたいと思います。

楽しい事や失敗をしてもいい時は、みんなで楽しくしていきたいと思います。

理美さんがクラスの自慢に書いてくれた、

「おこるときは、しんけんにおこってくれる先生です。」

という言葉が、私はとってもうれしかったです。そう感じてほしいと思っていたからです。

31人で暮らす毎日。どんなにお互い注意しあうことができて、叱ることのできる存在は、教師である私にしかありません。善悪については責任をもって教えなくてはならないと思っています。

笑って許される失敗。

行為そのものだけでなく、その根底にある考えを反省させなければならない間違い。

その違いを判断させることこそが大切なのかと思います。

筆者は、子どもを叱ることが年々減ってきた。年と共に子どもを見守れる範囲が多少広くなったこと、子ども同士のぶつかりに意味を持てるようになったことなど、理由は様々考えられる。しかし、叱る時は腹の底から叱る。それは変わらない。それなくして、どんなにほめても、子どもたちは教師のほめ言葉を技と見透かしてしまうからである。また、教師自身も不自然な自分に疲れを感じるようになる。不自然な流れは子どもの心を開放しない。

認めるということは、ほめることだけではない。

個性、自由という名の下に子どもをほめ続ける教師がいる。そこに教師の本心がないとき、子どもたちはそれを見透かしている。

真剣に悩み考える場と、腹の底から笑い合える場、その両面を経験しない子は不幸である。どちらの意味も、両面を知ってこそ初めて理解できるものである。

両面を知ってその両方を理解するということ言えば、次のことも大切なことである。

動と静

体を一杯動かした「動」の後に、静かに表現させる「静」の時間は必要である。その両面を踏むことによって、初めて両者が生きてくる。

活動ばかりさせて、子どもを動かしてばかりいると、一見活発なようだが落ち着きのないクラスになる。

逆に、几帳面な指導で静かに書かせてばかりいたりすると、落ち着きはあるが活気のないクラスとなってしまう。

授業の中に活動を取り入れることが盛んになってきた。生活科然り、そしてこれから行われる総合学習然り。子どもの動きばかりを導き出して、落ち着いて考え表現させる場の存在にはあまり目が向けられていない。子どもが動いてさえいれば活発な授業だと捉えるむきもある。

しかし、静かに取り組ませる時間は必要なのである。

一日の中で、音も出さずに静かに集中して取り組ませる時間は必要である。算数のドリルや国語の漢字練習、授業の感想など、自分の中に浸って集中する時間は必ず必要なのである。

3年2組学級通信ポコボンNo.4 3 6月8日（火） より

漢字テスト

5日の40問テストは、平均38.9というすごい結果となりました。35点合格などと、子どもたちの力を見くびってしまいました。うれしい誤算でした。

7日のテストでは、まるをつけられないのが全体で14こでした。驚きました。平均にすると39.5にもなります。土日で下がってしまうことが予想されたのですが、これもはずれました。

テストは20分間で行いました。

20分間の集中！

教室の中が、シーンという音で満たされるような、緊張感でみなぎった集中した時間となりました。

すべての時間がこのような静かな中で一日を過ごすことは、不必要ですし、不健康です。しかし、元気な時、ちょっぴりお下品な話題で大笑いする時、言い合う時、そして、静かに集中して取り組む時、そのメリハリがあって、良いクラスになるのかなあと 생각합니다。

今週は、算数のテストをがんばります。

6／1（火）校内の授業研究会で3・4時間目が自習となりました。

3時間目は、1時間目に書き方を確認しておいた計算ドリルの問題解きをしました。新しいノートに集中して取り組んでいました。

時々、南校舎の窓から様子を見たり（私はこういう知らないところからの子ども観察を得意としています。）教室に行ったり（最初は廊下から静かに眺めています。）、子どもたちの動きを見ました。しかし、しかし、驚くことに、45分間集中してドリルの問題を解いていたのです。すごいことです。

「先生、頭が痛くなった！」（石井智大くん）

『割れなかったか？』 「大丈夫！」

こういう会話さえありました。

4時間目は、国語のプリント3まいと、読書にしました。

「ぼ～っとして、本が読めなかった。」 「疲れた。」

クラスの様子は、自習の時にこそ表れます。新しいドリル、新しいノートを使つての時間、習ったばかりの問題という、子どもたちの意欲を高める部分が多かったにしても、それにしても立派な自習時間でした。

⑩当番の話

3年2組学級通信ポコボンNo.4 3 6月8日（火） より

当番の話

5月24日（月）から始まった当番の話がそろそろ全員一回終わろうとしています。

毎日、朝の会を大幅に過ぎて、1時間目に食い込みながらも続けてきました。

子どもたちは、やる場を与えられれば、何とかするものです。

みんなの前で話をして、クイズの場合は、たくさんの挙手の中から答える子を指名して「違います！」「当たりです！」と答えます。「ヒントは？」と言う声には「5文字

です」などと、即興で答えます。

お話の場合は、お話の内容を深く問う質問に答えます。

段々、発表者も聞く方も鍛えられてきました。

「聞こえないよ！」「もっと大きく」

「もう一度言って下さい。」

「はい！」「はい！」と挙手する子には、「問題を最後まで言ってからにして下さい。」

「そうだ、聞こえないよ。」

発表の仕方、聞き方が子どもたち同士で鍛えられていきます。

担任の私が間に入らなくても、子ども同士で話が進んでいくことに、大きな満足を感じているこの頃です。

この発表力は、国語に限らず、すべての学習に生かされてきます。

自分を表現することなしには、学習は始まりません。

みんなの前で話をするときの緊張感が薄れてきた頃、子どもたちの話し合い、つながりはいまよりさらに高まっていくはずです。

2巡目からは、クイズの本を使つてのクイズは卒業して、自分で物をもってきてのクイズやお話を中心にしていこうかと思っています。

朝の会に当番の話の時間を取り入れた。一日に2人(日直)ずつ輪番で行った。最初はクイズの本をもってきて読んでいた子も、自分の家族のクイズ、おもしろい話などと徐々に「自分」を表現できるようになってきた。自分で司会となってみんなからの質問を受けたり、挙手の中から友達に指名してクイズの答えを発表させたりとワイワイガヤガヤの楽しい時間となった。

本実践は筆者にとっては初めてのこととなった。

いや、このような形式は本論文中で述べてきた子どもたちの朝の会でも実践はしてきた。その形式においては大きな違いはない。発表の内容から言えば、以前の実践の方が質的には高かったかもしれない。しかし、そこには大きな違いが存在する。

発表者の発表が中心となることなく、聞く側の質問が中心となっているということである。以前の実践では、「発表者は1分間は話すこと」などとしていた。しかし、現在はそういうルールは存在しない。発表者の発表は短くても、結果として1人10分間では終わらない。たくさんの質問と付け足しが出る。発表者の内容と同じ経験談を話す子、それに付け足しをする子、その付け足しに質問する子など、子ども同士の話が絡み合っていく。

授業にその発表が生きている。

外部からの参観者を招いての授業でも、子どもたちの意欲的な発表に驚かれた。毎日の授業でも、授業者の筆者でさえも驚かされることがある。授業での子どもたちの活発な話し合いの場面を夢見ていた数年前が思い出される。

本年度は自分のどの方法が良かったのかと考えても、それに対する明確な答えが浮かばないでいる状態である。

本章で述べてきたすべてのことが絡み合っていることであろう。中でも休み時間に男女仲良く遊んでいる子どもたちの姿、そのつながりが生み出しているものであるということだけは確かである。

筆者の目指す学び合う集団としてのイメージに一番近いところに存在する学級として、

1999年2月、一週間授業を参観させて頂いた大津昌昭（奈良女子大学文学部附属小学校）学級の開放された子どもたちの姿がある。強烈なイメージとして筆者の記憶に残っている。

大津の実践の追試として始めた「当番の話」ではあるが、筆者の力量では当然、奥の深い大津学級の域にまでは達していない。筆者の今後の課題である。

《注記》

- (1) 佐伯胖「考えることの教育」国土社 1997 P. 75
- (2) 沼澤清一 第13回日本標準教育賞青年教師優秀賞受賞論文
「一人ひとりが存在感もてる学級経営」より